

# 東アジアの近代化と日本 和田英と『富岡日記』

山 崎 益 吉

Modernization of East Asia and Japan: Wada Ei and “ Tomioka Diary ”

Masukichi YAMAZAKI

## 一．はじめに

平成14年10月30日から11月1日にかけて、韓国ソウルの延世大学校・上南経営院で第7回東アジア実学国際学術大会が開かれた<sup>(1)</sup>。今回のテーマは韓国実学学会の担当で、とくに安教授の発案による西洋資本主義の東進にたいして東アジア各国、中国、韓国、日本がこれにどう対処したかに論点が絞られた<sup>(2)</sup>。筆者は『日本の近代化と富岡製糸 - 和田英と富岡日記 - 』を報告した<sup>(3)</sup>。意図するところは、明治初年和田英が富岡製糸場で工女として青春を傾けた富の形成は、富と徳との問題を根底に据え<sup>(4)</sup>、富の形成が人格形成に連動していたこと、少なくとも、民富論の立場にたって一身に国の富を担っていた点を報告することにあつた<sup>(5)</sup>。換言すれば、横井小楠が幕末から維新期に強調した富国論である。横井小楠はすでに早くも初期小楠のなかで「士民共に立ち行く道」、民富論を展開、これはそのまま後期小楠の「富ますを以って先務とすべし」とした富国論に生かされることになるが、和田英が富岡で実践したのはこの延長にあると考えたからである<sup>(6)</sup>。以下の展開は本報告に加筆、修正し纏めたものであることを前もって断っておきたい<sup>(7)</sup>。

明治維新の大事業が形の上で整ったとはいえ、近代日本の行く末に西洋列強の影がついてまわった事に変わりない。近代日本を西洋に負けない強国にするためには、どうしたらいいかが当面の課題であった。幕末から維新期にかけ、世界的な視野に立った人たちのなかには、早くもそのことに気づいた人が何人かいた。例えば、直接海外に出かけ西洋の人達や文物、制度に直接触れ近代化の道を説いた人、さらに直接西洋に出かけなくとも漢記された書物をとおして西洋の実態を知った人、例えば、横井小楠のようにブリッジメンの『海国図志』に啓発された人達など形態はさまざまであるが、世界に門戸を開いて広く交易することによって力をつけていく必要があると説いた点では、同じ視点に立っていたと見ていいであろう。広く海外から日本を見つめ直すという視点は、維新以降ももち越された。経済的に強化していかなければならないという点では、維新前も維新後もない

からである。政治形態は変わったとしても封建的な農村風景が一変したわけではない。依然として農業国であったから、強力な国家形成のためいかに農業国から工業国へ移行しなければならないかが当面の課題であった。

横井小楠の発案にあるとされる「五箇条のご誓文」に端的に現れているように、「知識を広く世界に求める」ことは、西洋列強のあり方、生き方を学ぶことでもあった。形の上では独立国であるが、西洋の植民地、半植民地化の脅威が完全に消えたわけではない。依然として、西洋列強の脅威に晒されるという恐怖から完全に解放されたわけではなかった。この不安から解放されるためには、完全なる独立、西洋列強に伍していく国力が必要であった。独立の基本は力づよい経済力を身につけることで、是が非でも実現しなければならなかった。では、独立を保障する経済力はこれをどう身につけていけばいいか。手本は西洋列強にあった。なぜ、イギリスは強大な国になりえたか。もし、イギリスのようになりたければイギリスがやったようにすればよい。単純な西洋列強模倣論は早くも19世紀にはいるや、首都を北海道に移せばイギリスのように強力な国家を作ることができると思じた本多利明のような重商主義者によって提唱された。かれが強調するのは単純なる地理的模倣論であって、詳細に分析したものではなかった。その点ブリッジメンによってある程度産業社会の生産、分業論に触れた横井小楠のような定見はなかった。いずれにせよ、産業革命をいち早く終えたイギリスのような国づくりが模範であったことに変わりはない。

イギリスが強大になりえたのは繊維産業を興したからである。だとすれば、日本も繊維から近代化を強力に進めればよいというのが、当時の近代化論の骨子であった。そのために、繊維による近代化が計られることになった<sup>(8)</sup>。富国策である。だが、これにはもう一つのスローガンが付随することになる。強兵である。本来ならば、国家的独立を勝ち取るためには経済的独立でいいはずである。強兵を掲げたところに日本の悲劇があったわけであるが、殖産興業だけでは国家的独立が覚束ないと考えたからに他ならない。ともあれ、富国策が取られることになった。それも国家の威信を掲げての殖産興業、繊維政策であるから、短期間のうち外貨獲得が急がねばならなかった。上毛カルタにも詠われているように、「日本で最初の富岡製糸」はこうした国家的戦略のもとに誕生する。富岡製糸場は国家的戦略のもと突貫工事によって、フランスの技術を導入して誕生したわけである。このことは裏を返せば、それだけ近代化が急がれたからである。<sup>(9)</sup>

和田英が富岡にやってきたのはこの頃である。まだ年若き二十歳前、今で言えば、高校生である。士族の娘として成長した英は、儒教よる厳格な家庭に育ち、国家的戦略を一身に背負って、おそらく国の将来を担う覚悟で長野松代からやって来たに違いない。17歳になったばかりの乙女が工女として、富岡模範製糸場にやって来たその決意こそが、当時の国際環境の厳しさを物語るものとして、特質大書していいのではなからうか。英が富岡でどう振舞ったか、また、富岡を退いてから松代に帰ってから六工社でどう振舞ったかをとおして、独立をいかに図っていかねばならなかったかを考えてみたい。と同時に、西洋技術にたいする「東洋道徳」の葛藤も当然問題になるが、松代における佐久間象山の世界観をも視野に入れ、英がどういうエートスで行動したのかを『富岡日記』

のなかから探ってみることにする。<sup>(10)</sup>

## 二．富岡製糸場の建設

近代日本の独立を一身に担って一刻も早く果たすために建設されたのが、富岡製糸場であった。富岡製糸場建設、運営にあたって新政府は渋沢栄一に大略一任した。渋沢は幕末徳川の海外随員としてフランスやオランダに赴くが、その時見聞してきた西洋の生産体制とくに合本主義、資本主義が生かされることになる<sup>(11)</sup>。さらに、渋沢栄一は農家の出身であったため養蚕技術に詳しくあった。大隈重信が信用し渋沢に富岡製糸場建設、運営を任せしたのは以上の背景があった<sup>(12)</sup>。

富岡製糸工場は現在の群馬県富岡市に建設された。なぜ、富岡製糸場が建設されたかは、この地が他と比較して大幅に生産条件を満たしていたからである。急いで近代化を計らなければならなかったから、生産条件に最も適合している地が選択されねばならなかった。当時、新政府はいくつかの候補地をあたっていたが、最終的に富岡の地が選択されたのは、何と云っても、繭の生産地であったことがおおきい。すでに、幕末期に養蚕は上州で盛んであったから、富岡が選択されたのはある意味で必然の帰結であったと言える<sup>(13)</sup>。

短期間のうちに生産性を上げるためには、生産条件が有利でなければならない。製糸業は良質の水を大量に必要とするため、大量の水を入手できるかどうかが決め手となる。富岡を挟むように流れている高田川、鎭川の良質な水が目にとまった。工場建設にあたって広大な敷地が必要であったが、江戸時代の遺産、七日市藩邸跡が生かされた。生産条件にもっとも必要とされた原料、繭、良質な水、広大な敷地が揃った。富岡の他に長野、埼玉が候補地に挙げられたが東京近辺で富岡が選択された条件のなかで、フランス人技士ブリューナの目にとまったのは、富岡がパリの風景によく似ていたということも選択の条件になった言われている。もちろん、富岡の住民の積極的な協力があったことは言うまでもない。

国家的威信をかけて富岡製糸場は明治3年10月本格的に始動するが、建設のスピードには目を見張るものがあった。設計図は12月26日に完成、渋沢栄一と姻戚関係にある初代工場長尾高惇忠は翌明治4年富岡入りし、現場に赴き手配に入る。同じ月にブリューナは機械買入れのためにフランスに赴く。3月近隣の山から木材が調達され、礎石は甘楽町小幡から取り寄せた<sup>(14)</sup>。突貫工事によって完成を見たのは明治5年7月であるから、そのスピードには驚かざるを得ない。明治3年10月に取り決められ、本格的に工事に入るのは明治4年に入ってからであるから、実質1年7ヶ月、2年弱という驚異的なスピードで完成したことになる。

工場の概要を見ておこう。東西二棟の繭置き場の長さは各104.4メートル、幅12メートル、高さ14メートル。操糸工場の長さは141.6メートル幅12.6メートル、高さ11.8メートル。この他ブリューナ館、事務室、食堂、休憩室、女子寄宿舎2棟。富岡製糸場の大きさがわかって。と同時に、新政府が近代国家建設にいかに力を注いでいたかが分かる。富岡の人口は当時2000人余であったから、

富岡製糸場がとてつもなく大きいかは言を待つまい。130年余経た今日でも、富岡市にはこれほどの建物は無い。その威光はいまだに衰えてはいない。富岡製糸場がいかにもに期待されたかは、当時流行した歌（明治初年富岡に流行）によく現れている。

上州一ノ宮	あづまやの二階
椅子に腰をかけ	遙か向こうを眺めれ
あすこに見えるは	ありやなんだ
あれこそ上州の	甘楽ごおり
音に聞こえし	富岡の
あれこそ西洋の	糸機械
西洋作りで	木はいらぬ
回り椅子で	屋根瓦
窓や障子は	ギヤマンで
糸操る車は	かな車
あまたの子どもは	連れだちて
髪は束髪	花ようじ
紫袴を	着揃えて
縮緬だすきを	かけ揃え
糸とる姿の	ほどの良さ <sup>(15)</sup>

創業間もない明治6年英照皇太后、照憲皇太后両陛下が訪問され、期待を込めてこう詠じている。富岡製糸場がいかなる立場におかれていたかは、この歌にすべて言い尽くされている。

いと車とくもめぐりて大御代の富をたすく道ひらけつつ  
とる糸のけふのさかえをはじめにて引き出すらし国の富岡<sup>(16)</sup>

こうした状況のなか和田英は富岡にやって来る。長野県松代出身の和田英、当時の横田英は17歳であった。英の外松代からやってきた工女は16人、一番若い河原鶴子はまだ13歳、金井新子は14歳、最年長者和田初子は25歳であった。横田英のちの和田英は富岡についてこう述懐している。「富岡町に着致しまして、・・・・町をみますと、城下とは申すは名のみで、村落のような有様に実に驚き入りました。・・・・翌二日・・・・富岡製糸場の御門前に参りました時は、実に夢かと思ひますほど驚き入りました。生まれましてレンガ造りの建物など稀に錦絵位で見ればかり、それを目前に見ますることでありますから無理もなきことと存じます」<sup>(17)</sup>。

英が近代技術に驚いたのは、富岡製糸場の大きさであり対象的な富岡の寒村との落差であろう。

まだこの時期、英は東洋道徳が何たるかは披瀝してはいないが、松代を出発する時父から言いわたされた言葉のなかに近代日本を背負う決意が示されている。「さてこの度国の為にその方を富岡製糸場へ遣わすについては、よく身を慎み、国の名家の名を落さぬように心を用うよう、入場後は諸事心を尽して習い、他日この地に製糸場を出来の節差支えこれ無きよう覚え候よう、仮初にも業を怠るようことなすまじく、一心に励みまするよう気を付くべく」<sup>(18)</sup>。富岡への派遣は技術を習得して松代に製糸場を開設の節は、国のために指導的な立場になって帰って来ることであることが窺える<sup>(19)</sup>。新政府の方針は糸で近代化を図り富を蓄積し、西洋列強に伍していくための模範工場として設立している事が長野、松代の14、5歳の子どもにまで厳しく伝わっているという事実である。

富岡に全国から工女が集められ、糸取りに精を出すことになる。うら若き工女の双肩に近代日本の富の蓄積がかかることになった。と同時に、技術はフランスから導入されたためフランス人技士ブリューナを中心に、初代工場長尾高惇忠によって進められることになった。当時、新政府がフランス人技士をいかに厚遇していたかは給料表によって窺うことができる。例えば、ブリューナの給料は月給600ドル、賄料150円で、横須賀製鉄所の首長が年報1万ドルであったからそれに次いで高給であった。英の『富岡日記』によれば、一等工女の月給は1円75銭、二等工女は1円50銭、三等工女は1円であったからブリューナの給料は和田英ら一等工女の数百倍であることが分かる。その他のフランス工女でも年報1000ドル、一番低い工女でも年給600ドルであったから、英らの俸給とは比べものにならない。新政府の富国策がいかに強力であったかは、この給料表を見ても頷ける<sup>(20)</sup>。

### 三．糸取り

工女が全国から集められ糸を取る段階になった。富岡製糸場の目的は単に糸を取るだけではない。高級な糸を取って外貨を獲得しなければならない使命を負っていた。ここ富岡で技術を習得し、全国各地に製糸業を興す事によって、国家的独立を果たし、西洋列強と対等な立場に立たなければならなかったからである。和田英ら工女が全国から富岡に集まり、一身その使命を引き受けることになる。

では、工女達はどう糸を取ったか。英の『富岡日記』を見るころによって、糸取りがいかに実践されたかを追ってみよう。当時、生糸の生産は全国各地で繰り広げられていたが良質の糸ではなかった。そこで、新政府からは外国の信用を獲得するために良質の糸を生産しなければならない旨が通達されている。例えば、繭をゆでて取るのと蒸して取るのでは雲泥の差が出てしまう。いくら良質の繭でも取り方によっては、光沢の優れた糸は取れない。たしかに、ゆでた繭は目方が出るが質が落ちるから、とても輸出というわけには行かなくなる。たとえ輸出が可能であっても、値段が上がらず外貨を稼ぐというわけにはいかない。そこで、導入されたのがフランス式の技術である。蒸して取ることによって良質の糸が可能となるからである。

富岡製糸場では二つのことを同時にやろうとした。生産性を上げるためには生産的労働と労働生

産性の増加が必要となる。二つの点はどこでも通用する原理である。生産的労働を増加することは全国から工女を集め糸取りに従事させることであり、労働生産性をあげることは機械生産など技術力に依存しなければならないが、近代国家として一歩踏み出した新政府にはその技術力がない。だから、破格の年俸によってフランス人技士、工女を雇い入れ、短期間のうちに生産体制を確立しようとしたわけである。西洋の強い秘密を西洋の手によって、一気に導入しようとしたわけである。こうした条件のもと英ら工女はどう対処したであろうか。英は初めて工場内に一歩踏み込んだ様子をこう述べている。「私共一同は、この繰場の有様を一目見ましたときの驚きはとて筆にも言葉にも尽されません。第一に目に付きました糸とり台でありました。台から柄杓、匙、朝顔二個（繭入れ、湯こぼしのこと）皆真鍮、それが一点の曇りもなく金色目を入るばかり。第二が、ねずみ色に塗り上げた鉄、木と申す物は糸枠、大枠、その大枠との間の板。第三が西洋男女が廻り居ること。第四が日本人男女見廻り居ること。第五が工女の行儀正しく一人も脇目もせず業に就き居ることでありました」<sup>(21)</sup>。英らが西洋技術に驚き入ったかは、座繰りの段階から抜け出られなかった当時の日本から見れば、夢であり同時に驚きでもあった。

英は糸取りの具体的な描写についてこう述べている。富岡製糸には釜が300あった。英は一等台大枠三個を受け持つことになった。繭から糸上げが難しい。糸上げがうまくいかない良質の糸は取れないし、光沢の良い糸は取れないが、これには熟練を要する。工女はこれに悩まされる。先輩に良く教えてもらって一人立ちとなるが、これがまた難しい。栄はその難しさをこう述懐している。「さて弟子はなれを致しまして、ひとりで揚げますようになりましたが、その切れることお話になりません。何故と申しますと、糸とりが切つて一向つなぎません。殊に友よりでありますから少しむらになりますと、直に横にまいりまして切れます。それをけつてつなくことが出来ません。……中々つなぎきれません。実に泣きました」<sup>(22)</sup>。英は糸取りがうまく出来ずに神仏に願をかけ、一心不乱に努力することによって糸取りが出来るようになり、一等工女に昇進することが出来た。こうして和田英は糸取りの仲間入りすることになる。だが、これは工女としてほんの入り口にすぎない。これから本格的な糸取りである。国家的使命を背負って富岡入りした英は、一等工女としても頭角を現す。さらに、英らには郷里松代に製糸場を建設することが決まっていたから、帰国したら見本にならなければならないという使命があった。糸取りにも自然力が入る。英は工場へ行くのが楽しみになるほどめきめき腕を上げ、報酬も一等工女として昇給し、松代からやって来た15人中13人が一等工女に昇進する。一等工女はどのくらい繭を取るかというと4升か5升であった。英は6升取ったというからかなり成果を上げる。しかし、8升取りもいたというから上には上がいた。そこで、生産性向上運動が展開される。労働時間を有効に使うことである。無駄話やトイレに行く時間も惜しんで、一心不乱にとり続けることによって英も8升取りを達成する。このときの様子を英はこう述べている。「ただ油断がないのと糸を切らさぬように用心いたしまして、湯を替えるにもとりながら追々さして、わざわざ手間を潰して替えると申すようなことは致さぬように気を付けておりますばかりで、すべて無益な時間のかからぬ用心のみ致しました」<sup>(23)</sup>。

英の糸取りにも余裕が出てくるようになる。和田初子との糸取り競争もお互いの技術の向上につながっていったので、むしろほほえましいエピソードである。和田初子がそんなに取れるはずがないと疑問をもったことから、初子は英が7粒も8粒も一度につけて取るのではないかということで、糸とり競争開始された。しかし、最終的には初子も英と同じように取れることになったため、疑いが晴れたわけである。英ら松代からやってきている者は「負けることが嫌いであります」と言っているが、この裏に松代を出発する折郷土の期待を一身に担い、国の富を築こうという自負心があったことに留意する必要がある。英ら松代からの一行は明治7年に入って繭の選定、糸揚げ、糸取りを終了し、3月頃から糸結びを修行、六工社もほぼ完成したということで明治7年7月富岡を後にする。『富岡日記』前記はここで終わっている。一年4ヶ月の修行であった。これから松代に帰って本格的な富国策が展開される。

#### 四．六工社での富国策

松代に帰った英は民間会社、大里忠一郎らの創業による六工社で富岡仕込みを実践することになる。富岡時代は模範生として全国に展開するための伝習所であった。だが、これからは民間会社として良質な糸を取って外貨を稼がなければならない。英らの技術が試されることになる。富岡仕込みを英は「富岡風」と呼んでいる。<sup>(24)</sup>「富岡風」とは何か。英は「富岡風」とは原理、原則に忠実に糸を取ることであり、と強調する。当時、粗製乱造によって輸出に耐えられるような生糸が製造されず、国際的に評価されなかったことも、「富岡風」が強調された所以であろう。明治2年4月には「今日の急務は、わが国固有の産物を務めて増息せしめ、且其品位を佳好ならしめ外国製品に卓絶するようにし、粗悪の品造り出すことなきよう専一にすべき」<sup>(25)</sup>と説き、さらに「生糸は、諸国の出品にこれあり、ことに伊太利のものもっともよしといふ、……わが国の生糸も、其の性質よからぬあらねども、製法よろしかぬ故に、其の売価は大いに下れり」(『諭告書』)と強調されていた。それゆえ、富岡シルクが国際的に第一級にならねばならなかったわけである。英が富岡仕込みによる第一級の生糸に拘る理由がここにある。松代に帰った英はこう回顧している。「五十人釜に一人ずつ、一人は一時間後とに交代。一釜を三人で代わる代わる糸を取って居ます。男女二人二十五釜の前に行きまして、糸のむらになりませんように見て歩きまして、太過ぎても細すぎても切れてしまいます。湯かげん、しけの出し方、蛹の出し方等やかましく申されます。それで聞きませんと叱られます。その上西洋人が見廻りしまして、目にとまりますと中に厳しく申します。これは直ちに工女中の評判になりますから、如何なる者も恥ずかしく思いますように見受けます。実に規則正しいもので、あれでなければ真の良品は製されぬかと思ひます。私か後年に至りましてもともかく富岡風で通しました」<sup>(26)</sup>。

「富岡風」といっても、明治6年2月の国際博覧会では一等になれなかった。富岡シルクは二等に甘んじなければならなかったから、早く一等になる必要があった。英が松代で目指したのは、国

際的に通用する第一等の生糸であったことは言うまでもない。松代に帰った英一行を待っていたのは、英らの期待とは裏腹に技術力の大きな落差さである。富岡製糸場は国際水準をいく機械設備であったが、松代では民間資本によっているから富岡とは比べものにはならない。とはいえ、国家の威信にかけても「富岡風」は通さなければならない。技術力において六工社と富岡とでは「天と地」ほどの差があった。技術力もさることながら原料である繭の質も良くない。天日干しで小粒である。だから、繭に重みがなく糸口が細くべたべた指につき取れない、と英は嘆くほどであった。だが、英が偉かったのは不平を言う前に、そうした条件でも良質の糸を取るよう懸命に努力した点である。「繭が悪い、機械の具合が悪い、蒸気がたため」などを比べたらそれこそ糸は取れない。英には国のためという大きな使命があったからである。

六工社は企業であるから「富岡風」というわけにはいかなかった<sup>(27)</sup>。なぜならば、利潤を上げなければやっていけないから、利潤を度外視した「富岡風」というわけにはいかない。良質な糸を取るという英らの目的と採算が合わなければやっていけないという大里社長との対立も、基本的には利潤をめぐる葛藤となる。そのことは早くも現れた。理想と現実の葛藤である。国際的にも通用する第一等の糸を取らなければご先祖様に申し訳ない、国家にも顔向けできないという英らの価値観と、何はともあれ会社が存続するためには利潤を度外視してはなにもならないという現実路線の対立である。どちらも正しい。この路線は当時日本が置かれた立場をそのまま表していると見ていい。国家の要請をうけて模範工場で世界的な水準の技術による糸取りと一介の民間企業のそれとでは、技術力、原材料の差はどうすることも出来ない。理想と現実の問題が早くも大里との対立として表面化する。その対立点は、繭を煮てとるか蒸して取るかに絞られた。煮て取ると品質は劣るが目方は出る。そうすれば当面の利益はあげられる。大里には国家的基準などは関係ない。当面利益をあげ企業の存続を図らなければならないから、国際基準などどうでもよいことである。だが、英らはそうはいかない。「富岡風」を実践しなければ何のために富岡へ行ったか意味がないから、大里に抵抗をする。英らに言われても大里としてはどうしようもない。英らは「富岡風」でいくとあくまでも強調する。会社側は「富岡風」が頑張っているから目方が出ないと言い張る。

英らはもし煮て取るようであれば、それはとても国際水準に勝てないからそうした方法では仕事が出来ない、こんな所にいられるものかと強気の姿勢で臨む。英らは蒸気取りと練り糸と一緒にされたら困る、と言い張る。大里基準と国際基準の葛藤である。そこで、英は打開策として一つの提案をする。煮て取った糸と蒸して取った糸とどちらが評価されるか、横浜へ行って評価してもらおうというのである。もし、煮て取った糸が評価されるならば私たちはそれに従いますが、蒸気取りが評価されるならばそれに従って欲しいという提案である。結果的には、蒸気取り糸が評価され、蒸気取りが選択されることになる。大里は「実に知らぬ時というもの、あんなことを申して、今になって見ると実に面目次第もない」述懐しているが、六工社でも英の「富岡風」が生かされることになった。英らが言うのも無理はなかった。当時、六工社の糸は品質が良くないために、「やめておくれよ西条の機械、末は雲助丸はだか」などと言われ、工女は「ぶた、ぶた」と呼ばれ馬鹿

にされていたという。英がこうした雰囲気にも我慢がなかったのは当然である<sup>(28)</sup>。何とかして、「富岡風」によって六工社を世界水準にまでもっていきたいというのが英らの願いであった。

六工社の蒸気系が国際的に評価されたとき、英の喜びはひとしおではなかった。その様子を英はこう述べている。「母も私も生きかえったような心持が致しまして、口も結ばれぬ位喜ばしく感じましたが、何を申すも売り込まぬ先は口に出すわけには参りませぬ。殊に煮てとらせてくれと申された時、大里夫人がとられた時、私が先にたつて立派なことを申して強情を張りましたことありますから、実に実に嬉しく言葉に尽されませぬ」<sup>(29)</sup>。西洋技術がいかに大きかったかは英らの行動によって証明できる。それも二十歳前後の娘達である。その気概はどこからくるか。国家的独立が富の形成によって、達成できるという強い信念がそうさせたに相違ない。当時の西洋技術の衝撃がこうした形で日本資本主義形成の基底になっているかを垣間見る思いであるが、基本的には今も昔も変わっていないのではないかと考えさせられる。

『富岡後記』は「売り込み後の六工社」で終わっている。そのなかで英は、「六工社とさえ申せば生糸では並ぶものないと人々に思われるようになりました。あたかも旭の昇るがごとき有様でありました。僅か半年も立たぬ内にかくまで相変ずのものかと、ただ驚きの外はありませぬ」。「富岡風」の勝利であった。西洋列強を目の当たりにして一介のうら若き和田英の行動をとおして近代日本のスタートを垣間見てきたが、当時の日本の置かれた立場がよく分かる。『富岡日記』は次の言葉で締めくくっている。「この上ともますます勉強して製糸場の隆盛になりますよう、また二つには富岡製糸場の御名を揚げたいと日夜念じて居りました」<sup>(30)</sup>。英が栄光の日々をこう述懐したのは大正2(1912)年であるから40年前のことである。今から130年前、英の回顧から90年以前である。下火になったとはいえ、グローバル・スタンダードが完全に消滅したわけではない今日、状況は少しも変わってはいない。英の苦悩はそのまま現代日本の苦悩でもある。

## 五．和田英の遺産

明治新政府は西洋列強と伍していくために、生糸生産による外貨の獲得を狙ったが、『富岡日記』はその様子を模範工女の育成、短期間の技術習得、技術の全国展開などを一工女の貴重な記録である。和田英は一年4ヶ月という短い期間にもかかわらず、一工女としての視点からその様子を丹念に記録している。『富岡日記』は「前記」と「後記」に分かれている。「前記」は伝習生として、「後記」は技術者としての記録であるが、どちらも国家的視点から展開され、とても二十歳前の工女とは思えない。裏を返せば、近代日本の出発がいかに国家的独立が急務であり、世界に伍していかなければならなかったの現れであると考えていいであろう。和田英の筆は率直にそのことを全編で伝えている。

松代からの一行は16名であったから、外にも記録があってもいいはずであるが、他は一般に言われているように「物言わぬ民」であった。英がこれほどまでに国家的使命を持ったのは英のエート

すがそうさせたと見た方がいい。それは儒教的な視点から考えることができる。松代には佐久間象山がいる。「東洋道德」というよりは「西洋芸(技)術」に力点を置く佐久間象山型だと見ることも出来ようが、どちらかと言えば、英の精神構造は横井小楠の「西洋器械の術・堯瞬孔子の道」に近いかもしれない。英の家庭に原因がありそうである。そこで最後に、英のエートを『富岡日記』、『我が母の躰』から見ておこう<sup>(31)</sup>。

富国の道を一介の乙女がこれまでに真剣に受け止めなばならなかったのは、叔父横田九郎衛門(機応)の悲哀を上げなければならない。機応は幕末松代の富国策を考え実行にうつし成功した。ところが、徳川の壁がこれに待ったをかけ、学の道を志すも志半ばで病に倒れてしまう。横田家の悲劇であった。英が徳川を恨んだことは言うまでもない。機応の精神と新政府の富国への道が重なる。英の躰はけっして徳川の道德ではない。むしろ逆であろう。機応が果たせなかった夢を追い求めての糸取りと考えていい。

横田家に伝わる儒教精神である。徳川の儒教ではない。孝や礼を中心とする純粋な儒教である。英が口癖のように強調している「そんなこととしてはご先祖様に申し訳が立たない」の精神である。「恥ずかしいとは思わぬか」が母の口癖であったが、英もこの点を踏襲している。横田家の伝統は儒教の経典『大学』や『小学』にのっとた人の踏み行う道であった。英が「本心」を強調し、さらに「心こそ心迷わず心なれこころに心心ゆすな」という歌を口ずさむのは、横田家の伝統であった<sup>(32)</sup>。ここには徳川の伝統、武士支配による秩序付けという発想はない。儒教倫理・道德、人として踏み行うべき道が英の踏み行うべき道でもあったと言えよう。徳を備えた開発論、富国論であった。

だが、その後の日本は富国強兵が歪んだ形として展開されてしまう。西洋列強の影に怯え、英が目指した富国策とは似ても似つかぬ方向へと歩み出す。普遍主義や公共の道からそれ、富国が強兵のために手段化、近代日本は横田機応の悲劇の道を強兵にあまりにも深入りしすぎ、取り返しのつかない悲劇を体験することになる<sup>(33)</sup>。

横井小楠があれほど強調した強兵の道は取るべきではない、と叫び続けたにもかかわらず、この後、近代日本は強兵の道を取り続けることになる。由利財政は大隈財政さらに松方財政に代わるに及んで、強兵路線が明瞭となっていく。そんな思いを抱きながら、会場近くの西大門刑務所歴史館に足を運んだ。富国とは裏腹の強兵の傷跡が生々しく飛び込んでくる<sup>(34)</sup>。天安の独立記念館に赴いた時よりも衝撃は隠せなかった。筆者の発表にたいする韓国交通大学の丁振生教授の近代化論には、日本の韓国にたいする近代化論が内包していたことを考えるとき、韓国の近代化はいかになされたのかを問うことが非常にきついものになっていることは否めない。西大門刑務所歴史館は、そのことを暗黙のうちに訴えているように思えてならない。

学会終了後、僅かな時間をさいてパゴダ公園に足を伸ばした。昨年平成13年に訪れた折、正門入り口に生々しい日本統治配時代の写真が張り巡らされていたが、今回はきれいに撤去されていた。だが、中に一歩足を踏み入れ、独立宣言ならびに奥まったところにあるパネルを見るとき、アジア近代化論が複雑に迫ってくることををを禁じえなかった。すでに、第二次世界大戦から半世紀以上が

経過したが、日本近代化過程における韓国の近代化に思いを馳せ、韓国の研究者に『韓国の近代化はいつごろ始まったのですか』という質問がいかに厳しいか、西大門刑務所歴史館、パゴダ公園のレリーフは示しているように思えてならない。

そのことをソウル大学の李栄薫教授がいみじくも語ってくれた。李教授や安教授のように日本に理解を示す過ぎることは、韓国ではまだ非常に厳しい。両教授は日本に理解を示しすぎたということで、韓国では特別扱いになっている。好意を示しすぎたということで両教授の主張は、低学年では禁止になっている旨を強調していたが、実に印象的であった。こうした光景を目の当たりにしたとき、東アジアの近代化論、資本主義論はこれからも地道に努力を続けていかなければならない、と痛感した次第である。

すでに、東アジア国際学術大会も今回で7回目を迎えることになった。韓国では3回目を迎えたことになる。筆者は第2回中国の山東大学以来参加しているが、当初から比べるならば、東アジア三国の共通基盤は徐々にではあるが次第に、確実なものになってきていることは確かである。この間、中国も経済発展が目覚ましく、韓国も近代化、近代祖国の創造を標榜するようになってい以来、日本と同じような問題を抱えるようになり、三国の経済格差は縮小傾向にある。そのことが、三国に意識の変化をもたらしていることは確かである。こうしたことが、今回のテーマ、「実学と東アジアの資本主義」となったと考えていい。安教授は時期を得たテーマを盛り込んだと言えよう。

今回の大会で、近代日本はせめて和田英のところまで降りて来る必要がある、と強く感じないわけにはいかなかった。すでに、横井小楠は「権変功利」の術は避けるべきである、とペリー直前の嘉永6年正月の段階で強調している<sup>(33)</sup>。武に偏ることを戒めるためであった。権変や功利では仁義の大道を貫くことができない、と考えたからに他ならない。つまり、天地には大道がある。ペリーの来航に際し「権変功利」では通用しない、武や小ざかしい智恵に陥らないよう働きかけたわけである。半年後、海外との対応については、さらに具体的に展開し、無道の国として振舞ってはならない旨を強調した。有道の国として振舞わなければならないと説いたわけである。有道の国が天地の大道にあることは言うまでもない。そうした背景を考えていた筆者には、このたびの東アジアの近代化を考える学術会議に参加するにあって、横井小楠の「権変功利」が気になっていた。韓国の近代化にとってまた中国の近代にとっても、日本の近代化が「権変功利」と受け止められないことを願いつつ、今回の大会を静かに見守ったというのが筆者の偽らざる心境であった。せめて、和田英のエートスまでという思いで臨んだ。本報告の趣旨がこうした背景を持っていたことを強調しておこう。とはいえ、近い将来、互いに有道の国を確認し合える東アジア諸国であることを願わずにいられないし、そうすることによって東アジアは、一つの大きな基盤を持つことになるのではないかと考えている<sup>(35)</sup>。

(やまざき ますきち・本学経済学部教授)

## 注

1. 韓国実学学会編、第7回東亜実学国際学術大会報告書『実学と東亜資本主義』2002年。参照。
2. 安教授の報告も今回の統一テーマと同名の『実学と東亜資本主義』であり、小農近代化論に焦点を当て、これまでの近代化論に新しい視点を当てている。この点をさらに敷衍した報告が、成近館大学の宮島博史教授の『東アジア小農論と思想史的研究』である。このなかで宮島教授は、西洋の基準で東洋の発展を考える研究方法は取らない、と強調している。これまでの主流は、西洋を基準として進んでいるか後れているかを判断し、日本は東アジアから考えるのではなく、西洋を基準として考える方法は、東アジアが発展してきている現状を考えれば、西洋を基準とした方法では本質が捉えられないというところに宮島論文の前提がある。近代日本の一貫した方法は、アジアは後れているからそこから切り離し、発展の要素を根本から考えなおさなければならない、という。安論文（前掲報告書、『実学と東亜資本主義』25頁 - 31頁）、宮島氏が提唱しているアジア小農論である。それゆえ、西洋を基準として発展論では論点が絞れないため、今日ではこうした方法はとれない、という。

さらに、宮島教授はこの論脈のなかでこれまで支配的であった丸山史学は誤りである、と次のように述べている。

「朱子学が国家体制を支える理念として注目を浴びようになるのは、周知のように江戸時代に入ってからであり、そういう意味では朱子学受容はきわめて意図的、ないし選択的受容であったといえよう。問題はそれではなぜ江戸時代になってから朱子学の受容が図られたのかということである。

この問題についての理解として典型的なものが、丸山に見られる理解である。丸山は『日本政治思想史』において、江戸時代における朱子学受容の原因として、江戸時代になってきわめて聖地に体系化された身分制に基づく位階秩序が朱子学に適合的であったと指摘している。しかしこうした考え方は根本的に誤った朱子学的理解に基づくものであると思われる。なぜならば・・・朱子学は身分制度の否定の上に成立したものであり、人間社会の秩序は身分制のように生来的に決められるものでなく、個人の努力によるものであると教えられているからである。したがって、日本における朱子学需要の要因は、全く別の所にあったと考えなければならない（報告書『東アジア小農社会論の思想史研究』154頁）。

なお、詳細については、報告書『実学と東亜資本主義』の前掲宮島論文（145頁 - 159頁）を参照されたい。

3. 拙稿『日本の近代化と富岡製糸 - 和田英と富岡日記』、前掲、報告書、646頁 - 645頁。
4. 現代日本において本来の意味での経済行為、経済活動、その結果である富の形成が経済の本来の相（すがた）である市民、国民[経世（国）経民]の人格形成に生かされているであろうか。換言すれば、富と徳との問題が真に統一されているであろうか。儒教が強調する普遍的な秩序（universal order）が実現する雰囲気にあるだろうか。

近代日本における人間形成と富の形成、経済活動は江戸時代から引き継がれ、歪んだ経世済民論として出発している。その理由は以下のとおりである。

- (1) 徂徠学による功利の術が基本である。徂徠以降、富獲得がたんなる手段と見なされるようになり、人格形成、人間形成にとって富獲得が経済合理性の方向に歩みだす。いわゆる重商主義的な経済活動の容認である。この過程で経済活動と人間形成はなにかよそ事（alienation）ととして、普遍的秩序にとって富と人間形成の間に断絶（discontinuity）がたち現れる。江戸時代後期の重商主義偏重とする経済政策が、そのまま近代日本に引きずられている。この断絶は人間形成と対立するものとして現れ、今日に至っている。
  - (2) 元来、倫理、道徳と経済活動が内面的に統一してすると考えられたが、経済の営みが倫理、道徳と対立断絶してしまっている。明治以降の経済学は単なる輸入経済学で、個個人の思想にとっては外のものとして考えられている。それゆえ、二重の意味で断絶していることになる。なお、この点については『日本の経済400年』（杉原四郎、逆井孝仁他編）に展開されている逆井論文『第一編概説』を参照されたい。
5. 近代の日本の人間形成も、江戸後期の重商主義、富偏重をそのまま受け継ぎ、近代化の道を嚆進し今日まで続いている。パブルがはじけくしいがこの傾向はますます強まっている。経済発展は人間解放のはずであるが、富偏重、重商主義政策はこの関係が対立構造になってしまっている。アダム・スミスや横井小楠が経済活動と人間形成の内面的な統一を考え、真の意味での経世済民論を提唱しているにも関わらず、近代日本はこの道から大きくそれてしまった。この点については、アダム・スミスの「道徳哲

学」体系のうち『道德感情論』(人生の書といわれている)ならびに『国富論』(民富論である)を連続的に参照のこと。さらに、横井小楠の『肥後藩時務策』ならびに『国是三論 - 富国論』を体系的に参照されたい。

それゆえ、歪んだ近代日本における人間形成、人間解放にとって経済活動や富形成は内面的にどうしていかなければならないかが、いま問われている。経世済民が真に問われている。経世済民、経国済民を視野に入れるならば、経済学は人間解放の学でなければならないことは明白である。経済活動、富形成と人間形成の内面的統一を図る。この問題を近代日本のなかでどう展開するかが今強く求められている。今回の東アジア学術国際大会の目的がここにあることは言うまでもない。

6. 資本主義の東進と日本の近代化 - 西洋資本主義を近代日本はどう受け止めたか。以下のように大別できよう。

- (1) 当時のグローバル・スタンダードに対して、日本の国は江戸時代後期に形成された重商主義経済政策を変え、富形成と人間解放政策へと積極的に転換したのか、経済政策の断絶があったのか。この意味で、断絶はなく重商主義政策をより一層強固に推し進めたことになる。
- (2) 富国強兵、殖産興業、脱亜入欧、福沢諭吉の脱亜論、儒教合理主義から近代合理主義への転換、倫理を中核とする実学から物理を中核とする実学への転換。
- (3) 横井小楠(堯舜孔子の道・西洋器械の術)と福沢諭吉(西洋文明) 佐久間象山 - 東洋道德・西洋芸(技術)、近代日本をリードしたのは福沢諭吉、佐久間象山型の生き方。

日本の近代化が急がれたために重商主義政策型から人間尊重、人間解放に向かう富の形成を図る余裕がなかった。富国強兵は国民、市民ではなく、国家基盤の強化におかれ、次第に強兵が強調された経緯がこのことを示している。江戸後期よりも一層の断絶へと向かう。経済学もまた然りであった。アダム・スミスは儒教から自然の概念を学んでいるといわれているが、近代以降の日本は西洋の経済学を輸入するのに汲々となっていたというのが実情である。この点については、Tessa Morris Suzuki "A History of Japanese Economic Thought, 1989" の「儒教的遺産」を参照。

富岡製糸場は江戸後期に形成された重商主義政策を、一層強固に発展させた新重商主義政策を布くことによって始められたわけである。強化された連続と見なしがいい。鉄道、繊維、化学など一気に輸入して物的基礎の強化に乗り出したわけである。イギリス、フランス、ドイツなどが模範とされた。富岡製糸場は糸による近代化を至上命令とした。優れた製糸を全国的に展開するために、模範工場として採算を度外視して建設された。

なお、この点については拙稿『近代群馬の思想群像』(高崎経済大学付属産業研究所編、貝出版企画、ブレン出版販売、1987)、『和田英と富岡日記』(前掲書所収)、『近代製糸業を支えた工女たち』(『近代群馬の思想群像』) 高崎経済大学付属産業研究所編、日本経済評論社、1989)、『富国策と蚕糸業 - 堯舜孔子の道・西洋器械の術』(同上、1999)。さらに、近著『製糸工女のエートス 日本近代化を担った女性たち』(日本経済評論社、2003年)、『横井小楠と道德哲学 - 総合大観の行方』(2003年)などを参照されたい。

7. 基本的に報告部分は変わっていないが、報告後の質疑応答、韓国、中国の研究者との交流による意見交換を踏まえた諸点について、加筆、修正を試みていることを前もって断っておこう。

8. 情熱を傾けた豊田佐吉の自動紡織機にかかる情熱も、民富論の代表として受け止めていいであろう。この点については豊田『豊田佐吉伝』(昭和10年、豊田佐吉翁刊行会)参照。

9. この点については、「フランス人技師の雇入れ」(『富岡製糸場誌上』富岡製糸場史編纂委員会、富岡教育委員会、昭和52年)参照。

10. 和田英や佐久間象山がどのような雰囲気の中で育ったかは、松代を訪れるならば一目瞭然であろう。象山神社、象山記念館、真田宝物館、文武学校、武家屋敷群、旧横田英宅、象山が電信実験を成功させた鐘楼などを垣間見るならば、松代がいかに知的雰囲気にあったかが分かる。

11. 洪沢栄一『論語と算盤』(国書刊行会、昭和60年)参照。

12. 洪沢栄一『維新財政談』中、『洪沢栄一伝記資料』第2巻、175 - 177頁。

13. 養蚕が盛んであった様子については、徳富蘆花『竹崎順子』参照。横井小楠の著『国是三論 - 富国論』で展開された養蚕奨励論の背景となっていると見ていい。

14. 群馬県甘楽町小幡連石山、長巖寺境内から搬出。今でも、当時の石切り場を見ることができる。

15. 前掲書、『富岡製糸場誌上』、1242頁。

16. 前掲書、153頁。
  17. 和田英『富岡日記』中公文庫、昭和53年、19～20頁。
  18. 前掲書、14頁。
  19. 「仏人技士の雇入れ給料」(前掲書『富岡製糸場誌上』) 181頁 - 190頁。参照されたい。
  20. 和田英、前掲書、49頁。
  21. 前掲書、21～22頁。
  22. 前掲書、29～30頁。
  23. 前掲書、61頁。
  24. 前掲書、36頁。
  25. 前掲書、11頁。
  26. 前掲書、36頁。
  27. 前掲書、108～114頁。
  28. 前掲書、99頁。
  29. 前掲書、147頁。
  30. 前掲書、149頁参照。
  31. 和田英『我が母の躰』信濃教育会編。昭和57年。参照。
  32. 横井小楠の「君臣の義を廃して」(『国是三論 - 富国論』を想起させずにはおかない。横井小楠はブリッジメンの『海国図志』に啓発され、アメリカの共和制を高く評価しワシントン大統領を高く評価する。「堯舜孔子の道」が基準であるが、ワシントンのやっていることは徳川のやっている君臣の道などよりはるかに進んでいると見る。アメリカの方が日本より進んでいるとみなすわけである。ましてや君臣の義などということはない。横井小楠は儒教では考えられない「君臣の義を廃して」というところまで進む。
- 明治以降、横井小楠のいなくなった日本から「君臣の義を廃して」などという議論は聞かれなくなる。横井小楠が暗殺されず「君臣の義を廃して」ということが少しは話題に上ることがあれば、戦後の大臣職にたいする考えは、少しは変わっていたのではないかと考えられる。臣民から国民に代わったにもかかわらず、依然として大臣だけにはなりたがるこの国の制度はどうなっているのか、横井小楠と共に考えさせられる。今からでも遅くはないが、いかがなものであろうか。なお、この点については、松浦玲『君臣の義を廃して』筑摩書房、平成14年、参照。
33. すでに、ペリー来航については一般に知れ渡っていた。『文武一途の説』はこうした背景のもとに書かれたものであるが、簡単にいえば有道の国として振舞えというにあった。なぜならば、攘夷論一辺倒になって武に偏ることを強く戒めるために書かれたものであるからである。前年に『夷虜応接大意』を表明し外交の基本方針を決めた横井小楠にとって、無道な振舞いだけは国際的な信義に触れるから取るべきではないというのが、この段階での基本方針であった。攘夷論の立場に立つも仁義の大道を見失ってはならない。有道な国であれば交易を行えばいいのであって、何も理由を訊ねる前から攘夷に決する必要はないと横井小楠は考えている。
- 仁義の大道を貫くという視点は固まっていたものの、海国通商については定見があったわけではない。交易論を是認するにいたるには『海国図志』の力を借りねばならなかった。通商交易も天地間固有の仁義によることがはっきりすることによって、横井小楠の内政、外交は仁義大同で統一されることになる。根底を貫くのは誠の一字であることは言うまでもない。
34. 西大門刑務所歴史館発行『西大門刑務所歴史館』(ソウル市西大門区?底洞101番地)参照。表紙にはこう書いてある。「わが国の独立のために、日帝の侵略に立ち向かって戦った末に、亡くなられた愛国烈士を偲び、烈士の自主独立の精神を振り返る、生きた歴史教育の場」。東アジアの近代化を共通の基盤とするためにも、こうした現実もまた深く刻みこんでおく必要がある。
  35. 筆者の報告にたいして討論者の丁教授は、次の4点を指摘してくれた。詳細については別の機会に譲ることにして、丁教授に簡潔にお答えしておきたい。
    - (1) 近代化の問題である。丁教授は近代化をどのように位置づけるかの問いかけであった。これにたいしてウォーラステインの世界市場に組み込まれた時点をもって近代化とする考えを示しておいた。この点については別の機会に詳論したいと考えている。
    - (2) 英の言う「富岡風」が、当時のグローバルスタンダードを意識したものかどうかということであっ

た。これにたいして、半ばそのとおりであるが、さらに儒教的精神に則って臨んでいたことを付け加えておくことが重要であることを指摘しておいた。

- (3) 市場経済に対する英の限界を大里忠一郎との関係で指摘したが、この点についてはむしろ大里忠一郎の限界を指摘しておいた。
- (4) 労働問題を問うものであったが、これにたいしては後の女工哀史的なものはなかった旨を述べ、それよりもむしろ誇り高き工女ならぬ紅女としてのエリート意識を持って臨んでいたことを指摘しておいた。

以上、簡単に安教授とのやりとり取りを列挙するに留めておいたが、なお詳細については別に稿を改めて展開したいと考えている。

なお、大会最終日総括がもたれたが、筆者は日本近代化についてコメントをしておいたので、簡単に触れておこう。これは討論総括者の成均館大学の李教授の司会によって実現したものである。

韓国、中国、日本それぞれ一人ずつそれぞれの国を総括するというので報告に入った。日本側の報告は以下のとおりである。

古藤友子(国際基督教大学)『儒教倫理と資本主義の精神』、荻生茂博(米沢女子短期大学)『日本における新儒教の受容と小農社会の成立 考察の前提を論じて、池田光政・熊沢蕃山論に及ぶ、小川晴久(二松学舎大学)』、『三浦梅園の<天境>職分論と礼学制度』、森野栄一(経済アナリスト)『地域経済に関する二宮尊徳の無利息貸付の意義』ならびに山崎益吉(高崎経済大学)『日本の近代化と富岡製糸 - 和田英と富岡日記』である。

成均館大学の李教授は、「日本の成功は一般的に認められているが、しかしそればかりではないであろう。渋沢に代表されるような成功談ばかりではなく、問題点もあるはずであるが、その点のところを踏まえて総括していただきたい」というものであった。そこで、筆者は大略次のように報告した。

「近代日本の発展は、幕末維新期に富の増加が人間形成と結びついているものでなければならない、という本来の民富論とはおよそかけ離れた方向で進んでしまった。つまり、富と徳との問題である。富は徳あるいは人格形成、人間形成のために産出されなければならないが、両者はコインの表と裏のような関係にたたねばならないが、そのことが忘れられて、富増大が目的となり、人間形成が置き去りにされてきたことが問題である。

例えば、江戸時代においては、少なくとも、荻生徂徠以前は富と徳、富と人格形成は表裏一体なものと考えられたが、荻生徂徠以降、貨幣経済と自然経済との乖離がおこり、富すなわち貨幣という考えが一般的となっていく。両者の関係はますます乖離し、幕末維新期に至ると重商主義政策のもと、かえって富が人間形成に疎外として働くようになる。この関係は維新後さらに強調され、引き継がれていく。こうした観点から見れば、近代と近代以前は連続しているといえる。幕末から維新期にかけて輸入された西洋経済学も、この点については疎外を克服するような仕方では対応していなかった。それゆえ、富と人間形成という点で二重の意味で疎外、断絶していたことになる。

これとは別に、富と人間形成を考えた人達もいないわけではなかった。例えば、横井小楠や和田英、横井小楠の高弟、明治新政府の初代大蔵大臣を勤めた由利公正のような人もいたが、その目的を達成する前に富国強兵のうち強兵に掻き消され、両者の統一というわけにはいかなかった。それどころか、その後国家多難ということを理由に両者の乖離は益々大きくなっていく。大正年間孫文のように強兵の道から引き返すような忠告もあったが、強兵の道に深入りしすぎた日本は、孫文に耳を貸すだけの余裕はなかった。強兵の道は第二次世界大戦によって終焉するが、戦後は経済に重きがおかれ、横井小楠が強調した『君臣の義を廃して』はどこかへ忘れ去られ、いやそれさえも存在していることすら忘れ去られているという実情では、とても両者の一致といえるような状況ではなくなっている。せめて横井小楠や和田英が目指した富が人間形成、人格形成に直接結びつくような方向で考えなければならない時期が来ていると見なしていいであろう。経済が本来の経済のすがたに復って、真の意味での経世済民論が展開されなければならない時期に来ているといえる。」

今回の大会で韓国、中国、日本の状況は以前ほど格差を感じない。以前はかなりの温度差があったが、韓国、中国とも経済発展が著しいため日本が直面している経済主義が韓国、中国でも大きく立ちあがるようになっていく。日本の経験が少しでも役立てるならば、筆者の報告はけっして益なしとしないであろう、ということ報告したことを強調しておきたい。